シネマサイキアトリー
映画の中の精神医学

小澤　寛樹

⑳

がんに伴う心の動きが描かれた
「海辺の家」（2001）

情報や支え　不安和らげる

がんと告知されたら、皆さんは心の動きがあるでしょう。その時、家族や周囲の人との関係はどうなるでしょうか。そんなことを考えさせるのが今回の米映画「海辺の家」です。

主人公のモンロー（ケビン・クライン）はCGも扱えない時代遅れの建築家。離婚し、今は独り身。既に再婚している前妻との間には16歳の息子がいますが、反抗期の真っ最中です。

そんなモンローは突然会社を解雇され、医師からがんで余命3カ月と宣告されます。そして彼はある行動を起こします。孤独な男が人生の終わりになくしたものを取り戻そうと願う、珠玉の一作品です。

がん告知を受けたとき、人はどう感じ、行動するか。有名な「死ぬ瞬間」の著者で精神医学者キューブラーロスは、がん告知後の心理を、衝撃→否認→怒り→取引→抑うつ→受容―という経過をたどるとしました。

具体的には告知を受けたとき、患者は「頭の中が真っ白になった」「どうやって帰ったか覚えていない」「家に帰ったら病院のサンダルをはいていた」といった激しい衝撃を受けます。

そして数日たつと、「あの診断は何かの間違い。患者を間違えたのでは」と告知を否定する気持ちになります。深刻なときは通院を拒否することもあります。しかし、診断がはっきりすると「何で自分だけがこんなことに」という気持ちになり、家族に怒りの感情を向けたり、自暴自棄になったりすることもあります。

「海辺の家」のＤＶＤジャケット
（ポニーキャニオンから販売中）

次に宗教や高価なサプリメントなどにすがりたくなり、約半数が適応障害やうつ病など気持ちが落ち込んだ状態になります。しかし、適切な治療やがんに対する正確な情報提供、家族や周囲の支えから、半数の人がこの抑うつ状態から回復します。

医療の進歩により、がんは急性ではなく慢性の病気と考えることができるようになりました。10年以上がんと付き合いながら日常生活を送る人や、寛解（症状が好転、消失）になる人もいます。ですから初発の告知より、がん再発の告知の方が深刻な精神的なストレス状況を引き起こします。

がんの終末期は痛みや意識の混濁に悩むことが多くあります。われわれ精神科領域では「せん妄状態」といって、抗精神病薬や抗うつ薬を使用した治療が必要になります。

以前、がんの緩和ケア病棟に往診していたころ、四国の〝ありがたい水〟をおちょこで1日1杯飲んでいた肺がんの男性がいました。特段信心深くはなかったようですが、奥さんの勧めで、内科医の許可を得て飲んでいたようです。

1週間ぶりに病室に入ると男性の姿が見えませんでした。その後、亡くなる直前まで意識も曇らず、安らかに逝ったと家族から手紙を頂きました。水1杯でも何か周囲、身近にあるものを信じる、頼るということが日本人らしいスピリチュアルケアなのかもしれません。

厚生労働省は原則として全がん患者に告知を勧めています。告知をきちんと受けた人の方が、あいまいに情報を伝えられた場合に比べて不安・抑うつ状態になりにくいという報告があります。

人生の幸不幸は「ぽっくりいけるかどうか」と言う人もいますが、ある雑誌の「理想の死に方」特集では「がん死」が人気がありました。理由として、死ぬまでの時間を有効に使えるということが挙げられていました。読者の皆さんは「ぽっくり」派ですか、「じっくり」派ですか。

（長崎大大学院医歯薬学総合研究科精神神経科学教授）

がんと心に関する推薦映画

▽「生きる」
（1952年・日本）
▽「みなさん、さようなら」
（2003年・カナダ、フランス）
▽「死ぬまでにしたい10のこと」
（2003年・カナダ、スペイン）
▽「象の背中」
（2007年・日本）

……

長崎大精神神経科学教室のホームページのアドレスはhttp://www.med.nagasaki.u.ac.jp/psychtry/

長崎新聞　H23.2.7付